

Don't kill から 勇気を持って Let's do に

転換をね。そして子供中心にやろう、子供が大人になったときに核の廃絶と世界の平和が実現出来るように、いつも子供を入れて。

(木村) あそこでは先生は詩を詠まれた。「先生の哲学詩」ですね。僕達はいろんな事をやる勇気を持って。今の時代に勇気ある発言があまりありませんね。日野原先生は96歳で、僕達の先を歩んでおられる。すごい勇気を持った発言だけでなくその行い、例えば広島で「Peace」を命を尊ぶを実現させて、小澤征爾さんを呼んで音楽会をなされた。すごい勇気で先生は前進していらっしやる。

やっぱその勇気のルーツはキリストのメッセージじゃないかと僕は思っています。

(日野原) プラトンの言う、四つの元徳には、英知、正義と、そして勇気が入っている。キリスト教では信仰と愛と愛は大切なことになっていきます。

日本でも勇気について書いている人がいるかを調べたんです。そのうしたら与謝野晶子がいまして。あの人は11回お産をしてね、最後は双子が生まれ1人は死ぬんです。それで11人の子供を持ったのですが、どういふ子供に育てるのかについて書いています。私は人に任せないで、勇気ある息子と勇気ある娘を作りたいと、勇気論を書いているんですよ。面白い。

(木村) 僕自身も本場に弱くて小さい者なのですけれど、キリストにあつて生きていく勇気を与えられます。ヨハネによる福音書



R.K. IMURA

書の16章3節に「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」と記されています。聖書の中に「老人は夢を見、若者は幻を見る」と書いてありますけれども、先生は本場にいつも夢を見て、そして勇気を持って、Don't kill だった人たちに「Peace」に変え

ておられますね。そういうことを若い世代のクリスチャンが先生から学んで教会の中に広げていく事が出来ればいいなあと思っています。先生は世の中を大きな変革の中で導いて、そして医学や看護教育、ホスピス、病院経営などでも本場に勇気ある変革を今も続けていらっしやる。

(日野原) 今度京都大学の教授が皮膚の細胞からいんな細胞を自由に作れるようになったという事が、新聞に載ってましたね。あれは非常に大きな反響を与えていてね、一つの革命的な事になるでしょ。ノーベル賞になるでしょう。

(木村) 今日は、先生に「セル(細胞)」という雑誌(電子版)に昨日掲載された原文をプリントアウトして持ってきました。今までは要するに万能細胞、神経になったり、心臓になったり皮膚になったりする細胞を受容卵を壊して作らなければならなかった。そのためにアメリカではものすごい反対がありました。ですけど、日本でもやられたこの研究は倫理的に極めて受け入れやすい。私たち人間は顔の皮膚から作った幹細胞(iPS)です。他人から臓器を買わないで、これによって自分の臓器を作れば、移植しても拒絶反応もありません。新しい時代が来る。その夜明けが昨日始まったということでは世界的に本場に大きなニュースです。

しかし、そうした新しい時代の中で僕達はその科学が暴走しないように見張りをしていく責任があります。新しい技術が臨床現場で使われるためにはある意味でルールに沿った研究がなされなくてはいけません。そういうところでも宗教者がきちんと発言していかなくてはならないと思

います。病院とか大学の研究所とかの一般の職者の参加による倫理委員会、そういうところで宗教者が招かれてお話しするケースがあります。聖路加にも倫理委員会がありますね。

(日野原) みんなある。それで日本の各大学の倫理委員会は今までみんな医者がかりがやっていたの

日本の聖書と宗教者への責任

が医者以外に、倫理の分野の人とか、牧師とか僧侶とか、宗教家まで入ったりしてね、サイエンスをやる人以外に入らないといけない。倫理問題だから。

(木村) 私もかつて厚生労働省の厚生科学審議会の委員をやっておりましたけど、健康におけるスピリチュアリティの問題をWHO総会の議題の中に入れるのかがその前段階で厚生労働省側でう対応していかかわらなくて、カトリックの曾野綾子さんとプロテストの私の私でコメントしたことがありました。倫理の問題に宗教者が積極的に発言していかないとけないと思います。それと高

いようと思われま。 (日野原) 今65歳以上の人口が20%ちよつと出たことだけね、日本は25年の間に急激に高齢国家になったんですよ。フランスなんかは125年もかかっています。アメリカはそういうふうになって見えないもの本場のものがあるってわかってくるんですよ。

(日野原) 公衆衛生の一番効果的な方法はそれなんです。オス

す。それから最後に一緒に「シャボン玉」の歌を歌うんですよ、僕の授業は歌で始まって歌で終わるの。最初は校歌、最後はそういうふうな歌でね。命の授業というの、みんな持っている時間、時間を大切にしよう、そして見えないものに本場のものがあるってわかってくるんですよ。

(日野原) 公衆衛生の一番効果的な方法はそれなんです。オス

に出来ないものの中には大切なものがあると思う。命は見えないけど感じるものだ。時間は目には見えないね。あなたたちは使える時間を持っている。朝から晩まで寝る間も全部自分の時間を自分のために使っている。今はあなたたちが成長するのに必要だけど、でも大きくなったら自分の持っている時間を何のために使って欲しい、使わなくちゃならないと話していくと段々わかってくる。今は一生懸命勉強しなさい。酸素が見える? 酸素がなかったら死んでしまう。風は見えないけど木や雲が動いているのを見て風があると思う。でも風がなくなっちゃ、雲が頭の上に流れてこないし、雲がなければ雨も降らないから、みんな死んじゃう。風がないとみんな死んじゃう。そんな大切なものはみんな目に見えない。命は目に見えない。僕は96年のたたくさんの時間を今持っていて。今の時間も次の時間も君たちはみんな使えるんだよ。だから命というのはね、あなたが持っている時間だと話

命の大切さ・戦争と区別をしよう

世界の子もたちが大人になる日までは、平和の世界が必ず実現されることを老人たちは強く念じてその時が少しでも早く来ることを老人は待とうよ

他をいつも配慮する愛の寛き心で、真の平和を世界の隅々まで広げていこう

平和の輪を皆で広げ、勇気をもって前進した前進しよう

(司会者) 今日はありがとうございます。紙面を通してのこの理念と、両先生の元気の源がお伝えできればと思います。

僕もいんな国、タイ、ベトナム、スイス、アメリカと30年間海外で仕事をしました。そういう中で特に1950年代に東南アジアではワークキャンプに参加した時に、日本軍による戦争の被害を受けた人たちに会って若い世代の日本人として本心に底から反省せざるを得なかった。

本場に戦争というのはいよいよもど、我々は再び武器を取って戦うことは止めようという折り返し、その時に共に読んでいた詩の47編に「すべての民よ、手を打ち鳴らせ。神に向かつて喜びを叫びをあげよ」と書いてありますが、それを平和への祈りを込めて「幸せなら手をたたこう」という歌にしたんです。フィリピンの人たちが「私たちはかつて日本との戦争で苦しい目に合ったけれどもお互いに態度に示して平和である喜びを生きて行こう」と折ってアメリカと一緒に軍隊にならな。完全な軍隊。そんな危機にあるんだよ。まったく。僕は日本は九曜になつてね。犠牲はあるかもわからないけれども九曜になつて日本は良いことだけをやる、良いものを出そう、悪くなるものは出さない。もちろん人を殺すような武器は出さない。

(木村) 1999年に、ハーグで国際平和市民会議があつて、日本の憲法第9条を世界で受け入れてもらえるような運動をしましょう、日本の9条に学び、戦争を放棄しようという宣言を出しています。

(日野原) 私は1年前に国会に呼ばれて公聴会で、徴兵検査に準じたことをやってほしいと言った、それは大学を出て、就職を決めたら、二年間は健康な人はどこか難民のキャンプでもネパール

でも行って働いてから職につく。とにかく徴兵検査がないのは日本だけだ、ドイツでもイタリアでも自分の国は自分で守るんだ。日本だけはアメリカに頼んで。何にもないのはおかしい。だからその時間を奉仕して帰ってきなさい、そうすれば世界を知る日本人になるよ。スケールの大きな世界人になるよ。

(木村) 恵泉女学院大学でもそうですが日本国内や海外でもボランティアをやっている学生たちがどんどん増えてきています。

(日野原) 世界人が生まれる。新しい教育の在り方として海外体験学習やボランティア活動を行う方向がこれからはますます出てくるでしょうし、それに積極的に参加するというのは本人にとっても新しい勇気ですね。

(日野原) 大きい経験を持って入るんだからね。年を取ったら思い切つて発言出来るね。

(木村) 今日の対談の最後に、日野原先生の哲学詩の一部を引用させて頂きたいと思ひます。「平和の目を子どもたちが」という詩の最後の部分です。

命の大切さ・戦争と区別をしよう

日野原 重明 (ひのはら・しげあき)

1911年、山口県生まれ。37年、京都帝国大学医学部卒業。41年、聖路加国際病院内科医となる。内科医長、院長を経て現在、理事長・名誉院長、聖路加看護学園理事長、勤労ライフ・プランニング・センター理事長ほか。99年文化功労者、2005年文化勲章受章。2000年、新老人の会を結成。著書「老いを創める」朝日新聞社、「生きかた上手」ユーリク、「十歳のきみへ——九十五歳のわたしから」富山房インターナショナルほか。日本基督教団玉川平安教会員。

木村 利人 (きむら・りひと)

1934年、東京都生まれ。早稲田大学大学院修了。世界教会協議会(WCC)・エキメニカル研究所副所長。米ジョージタウン大学・ケネディ倫理研究所研究部長、早稲田大学人間科学部教授を経て、恵泉女学院大学学長。厚生労働省・厚生科学審議会委員、医師国家試験委員、日本医師会生命倫理想談会委員、WHO国際委員など歴任。著書「いのちを考える」日本評論社、「自分のいのちは自分で決める」集英社、編著「クリエイティブエイジング」ライフサイエンスほか。日本基督教団豊南坂教会員。